

学融合推進センター 運営委員・協力教員のご紹介

前号より引き続き学融合推進センターの運営に携わっている教員の方々よりいただいたメッセージをご紹介します。

1. センター運営委員 岡村 昇一 教授 (物理科学研究科)

総研大の特徴として、大学の名称の「総合」を意識してか、文系・理系を総合した広い研究分野を擁した大学、という説明が比較的気軽に語られることがある。確かに単科大学と比べれば研究領域の範囲は広いと言えるが、大型の総合大学と比較した時は、総研大の中に欠けている重要な学問分野が多いことが目についてしまう。それよりも、本来我々が大学の特徴として意識すべきことは、他の大学ではなかなか見つけることができないような、機能の突出した研究組織の集合体であることで、逆説的に言えば非常にアンバランスな構造を持った大学であることではないか。学融合推進センターの目指すところも、一般的な文理融合という視点だけでは、世にある多くの総合大学に対抗できるだけの手持ちの材料を我々は持たないという気がする。総研大を構成している各基盤機関の特徴（非常に特化した研究領域）を前面に出すことによるのみ、他の大学に対して総研大のユニークさをアピールすることが可能になる。

このような大学全体の視点から生まれるプログラムは、これまでも葉山が主体的に取り組んできたわけであるが、その担い手としての組織が明確な存在としてあったようには思えなかった。新しくスタートした学融合推進センターは、プログラムの実行主体の実体と責任を明確にすることが可能であるように思う。私も運営委員の立場から、総研大の存在感を少しでも打ち出せるような企画を考え出したいと思っている。

2. センター運営委員 嶋田 葉子 教授

(先導科学研究科・センター協力教員)

私は、1996年に今の学融合推進センターの前身である教育研究交流センターに助教授として着任した。そして、交流センターの事業の一つであったグループ研究「生命体科学」に参加した。このグループ研究では、細胞、遺伝子、ヒトの疾病、あるいはさまざまな地域の人々の生業形態や社会構造、文化まで幅広い分野を含み、各々の分野の間は緩く「歴史性」というキーワードで結ばれていた。「歴史性」というキーワードを通してお互いの分野を理解することから始まった。自分の今まで知らなかった分野について、いろいろな話を聞けること、理解できることが楽しかった。このような緩い結びつき、あるいは各分野の結果を自分の中で消化することが学融合推進センターの目指すいわゆる「文理融合」ではないかと思う。

「文理融合」研究の難しいところは、「何を明らかにするために」というその目標設定にある。まずは、自然科学と文化科学が共通の事象を異なる視点から捉えて、異なる視点にたったお互いの考え方を面白いと捉えることが大切ではないか。

学融合推進センターの活動として、文系と理系どちらもが、それぞれの視点で取り組むことのできるテーマ（例えば、「起原」、「対称性」、「階層」など）を提示して、シンポジウムやフォーラムを開催し相互の理解を深めることから始めてみるのはどうだろう。文理融合の実現に向けて、センターの活動に協力していきたいと思う。

総研大・生理研国際シンポジウム

12月16日(木)～12月18日(土)開催

平成22年度総研大・生理研国際シンポジウム「New Frontiers in Brain Science: Towards Systematic Understanding of Human Being (脳研究の最前線-人間の総合的理解を目指して)」が愛知県岡崎市の自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンターにて12月16日より三日間に渡り開催され、日本国内からだけでなく米国や欧州からも第一線でご活躍の研究者を招き、脳研究についての闊達な議論が行われました。また、最終日の午後には一般向けのシンポジウムとしてポストイベント「神経科学神話を越えて」が開催されましたのでご報告いたします。

シンポジウム当日の様子につきましては総研大ニュースレター2月号に生命科学研究科の南部篤教授が記事を掲載される予定ですので、そちらをご覧ください。

1. ポストイベント 「神経科学神話を越えて」 12月8日(土) 午後1時半～

総合研究大学院大学 理事 池内 了

現在、脳神経科学に関するさまざまな言説が社会に流布しており、そのなかには根拠が曖昧とか科学的に実証されていないとかの事柄をまことしやかに述べて神話になっているものが多い。OECDは、いくつかの事例をあげて、脳科学研究の信頼を損なう恐れがあると警告している。このポストイベントでは、池内の疑似科学としての神経科学神話の講演の後、定藤・藤田が脳科学の専門家として神経科学神話の由来や実情、社会との接点で生じている問題点などを具体的に指摘した。さらに、より広い哲学的・心理学的見地から河野が脳科学をいかに捉えるべきか、米本が生命現象そのものの認識論を展開した。また、パネルディスカッションでは寄せられた多くの質問や会場からの多彩な発言もあって1時間半に及び、参加した約180名の研究者・学生・市民が交流し合える良い機会になった。

オーガナイザー:

南部 篤

(総合研究大学院大学・生理学研究所)

パネリスト:

池内 了

(総合研究大学院大学)

河野 哲也

(立教大学)

定藤 規弘

(総合研究大学院大学・生理学研究所)

藤田 一郎

(大阪大学大学院)

米本 昌平

(総合研究大学院大学・東京大学)

学融合研究事業

1. 公開研究報告会の開催について

1月20日より二日間に渡って総研大・葉山キャンパスにて公開研究報告会が開催されます。この公開研究報告会は学融合推進センターが支援する様々な研究について総研大内外を問わず多くの研究者の方に知っていただくこと、そして来年度以降も継続が予定されている研究については参加される方々からのフィードバックをいただくことで更に発展させていくことを目的として計画されました。第1回目となる今回は、平成22年度に採択された10件の公募型共同研究について各20分間のプレゼンテーションを、若手研究者研究支援・女性研究者研究支援として採択された21件の個人研究に関しては1日目の夕方にポスタープレゼンテーションを行う予定です。参加の申し込みは既に締め切らせていただきましたが、当日ご参加されたい場合には総研大総務課葉山事務係までご連絡下さい。

Email: office_sendou@ml.soken.ac.jp

2. 平成23年度 研究助成事業の新規公募について

平成23年度公募型共同研究・若手研究者研究支援・女性研究者研究支援の新規公募が2月上旬頃より開始される予定です。募集内容の詳細が決まり次第、学融合推進センターのホームページなどに掲載いたしますので、申請をご希望される方は順次ご確認ください。今年度同様、多くの研究者からのご応募をお待ちしております。

学融合教育事業・学術交流事業

1. 平成23年度 全学教育事業の募集について

総研大全学教育公募事業は、本学各選考における基盤機関の人的・研究環境を活用した専門的な大学院教育を行うことと併せ、各専攻との連携によって高度の専門性と広い視野を併せ持った研究者を要請する為の総合的な教育を行うとする本学の理念に基づき、以下の事業区分に相応しい教育プロジェクトに対し助成を行っています。

① 各専攻・各研究科横断型教育事業

- A：次世代研究者育成教育プログラム
- B：国際的研究リーダー育成プログラム

② 全学交流型教育事業

- A：海外総研大レクチャー
- B：総研大レクチャー

③ 学生企画教育事業

申請書類の提出先は学融合推進センター事業支援事務担当 zengaku-edu@ml.soken.ac.jp まで、提出期限は平成23年1月28日(金)となっております。宜しくお願いいたします。

学融合推進センター 事業予定表

学融合推進センターでは1月から4月にかけて下記の事業が予定されております。各事業の詳細につきましては本学のホームページにてご確認ください。

総合研究大学院大学 HP: <http://www.soken.ac.jp/event/index.html>

1月21日・22日	学融合研究事業 公開研究報告会
2月7日	第2回 実践的大学院教育研究会 「大学院における協調学習」
3月23日・24日	平成22年度 総研大学術交流会
4月7日・8日	前学期 学生セミナー
4月27日・28日	学融合推進センター棟竣工記念式典

編集委員会より

謹んで新年のお祝いを申し上げます。昨年4月より正式に発足した学融合推進センターですが、総研大の研究・教育環境をより良いものにすべく本年も様々な事業を展開していく予定です。センターの活動にご支援ご協力のほど宜しくお願いいたします。

また、その活動の内容につきましてはホームページやニュースレターを通じて、随時ご報告していきたいと思っております。次号のニュースレターは4月の発行を予定しております。(文責:見上)

学融合推進センター HP: <http://center.soken.ac.jp/index.html>